

令和3年度 第2回芦屋市立美術博物館協議会 会議録

| | |
|-------|---|
| 日 時 | 令和4年3月23日(水) 15:00~17:00 |
| 場 所 | 芦屋市立美術博物館 講義室 |
| 出 席 者 | <p>会 長 藪田 貫 副会長 岡 泰正 委 員 飯尾 由貴子 委 員 若林 敬子 委 員 安部 太一郎 委 員 星野 剛一</p> |
| 欠 席 者 | <p>委 員 中島 幸夫 委 員 丹羽 洋文</p> <p>(芦屋市立美術博物館指定管理者) 館 長 石井 茂(株式会社小学館集英社プロダクション) 学芸員 室井 康平(株式会社小学館集英社プロダクション) グローバルコミュニティ株式会社 渋谷 真幸</p> <p>(事務局) 社会教育部長 中西 勉 生涯学習課長 岩本 和加子 生涯学習課係長 竹村 忠洋 生涯学習課 石田 直也 生涯学習課 松本 淳子</p> |
| 事 務 局 | 生涯学習課 |
| 会議の公開 | ■ 公開 |
| 傍聴者数 | 0 人 |

1 会議次第

- (1) 社会教育部長挨拶
- (2) 報告
 - 1) 令和4年度(2022年度)事業計画について
 - 2) その他(工事の概要説明)
- (3) 議題
 - 1) 展示状況について(市展について)
 - 2) その他(歴史資料展示室の常設展示化の説明)

2 提出資料

- 資料1 美術博物館改修工事・谷崎潤一郎記念館改修工事
- 資料2 第66回芦屋市展 受賞者及び受賞作の決定について
- 資料3 受賞者及び受賞作品一覧
- 資料4 芦屋市展 出品状況（第61回～第66回）
- 資料5 歴史資料展示室整備（予定）について
- 資料6 歴史資料展示室 常設展示（案）
- 資料7 市立美術博物館 歴史資料展示リニューアルに関するアンケート
（参考資料）
 - ・『美博だより』
 - ・リーフレット『2022年度展覧会情報』
 - ・展覧会チラシ（「北原照久コレクション展」・「第66回芦屋市展」）

3 審議内容

（藪田会長）

それでは、議事次第に従いまして進めさせていただきます。資料に基づいて令和4年度事業計画書について事務局より報告をお願いします。

（事務局：岩本）

はい、報告1「令和4年度事業計画」につきましては、室井学芸員から説明させていただきます。

（室井学芸員）

<参考資料に基づき説明>

（石井館長）

若林委員の団体にベーゼンドルファーのピアノのイベントをしてもらうことになりました。このピアノを市民に弾いていただく機会がなく以前からお話があったのですが、今回の「北原照久コレクション展」会期中に開催しようということで、ぜひ、市民の方々に触っていただく、弾いていただくという機会になります。

今年度のスケジュールについては改修工事のため7月から来年の3月まで休館なので、4月から6月の3か月にホール及び展示室1・2は「北原照久コレクション展」で、歴史展示室は美術のコレクション展をします。

続きまして、『美博だより』をお配りしておりますが、これは年に一回発行しているものです。

<『美博だより』を用いて令和3年度事業報告>

私の方から以上です。

（藪田会長）

ありがとうございました。何かご意見がありましたらお願いします。

（若林委員）

ブリキのおもちゃ展はとても楽しみです。子ども達が最近遊んでいるおもちゃを見ますと、プラスチック製が圧倒的に多いです。それを見て何だか違和感がありました。あのツルツル感、あの硬さ、なんか子ども達がこんなのでずっと遊んでいていいのかな、というふうに思っていましたら、先日、テレビでプラスチックが人体に与える悪影響をテーマにした番組がありました。それと、我々を取り巻くものも、本当にプラスチックが圧倒的に多いですね。そして、やっぱり私の抱いた違和感は当たってたのかな、と思いました。子どもに与えるおもちゃには、もっと布や木とか、そんなものがあるといいなあって思っています。手作りのものを孫と遊ぶ時に、いっしょに手作りしてみるとか、そんなことを時間がある限りやってみようかなとちょっと反省を含めて思いました。このブリキというものは、人体に悪影響を及ぼしそうにないと思います。そういう意味で、とても楽しみです。そして、この期間中に先ほどお話いただきました、ベーゼンドルファーのピアノを、たくさんの方々に弾いていただく、多くの方々に触れていただくを企画しました。イベントを企画することで美術博物館に貢献したいと思っております。以上です。

(薮田会長)

他の委員の方で何かありましたらお願いします。

(安部委員)

おもちゃの展覧会というのは、今までなかったと記憶しています。今、子ども達はおもちゃで遊ぶのですけれども、ゲームがすごいですよね。子ども達の会話を聞いていると、どんなゲームを買ったとか、サンタさんからどんなゲームをもらったとか、よく聞くんですけども、中にはおもちゃで大事に遊んでる子もいて、子ども達にとっては非常に魅力的なテーマであると思います。また、北原氏は名前はわからなくてもテレビに出ておられるので、よく知っていると思います。それで、ゴールデンウィークに子ども達が来ることができると思いますので、早めに学校の方にチラシやポスターを送っていただいて、告知をさせていただけたらと思います。できればカラーの方が目立つのでいいです。白黒ぐらいでは目立たないので。大きめのポスターとか。掲示もしますので、なんとか早めに、送っていただきましたら子ども達に告知します。図工室に置いていても、チラシをもって帰る子がいます。子ども達と話をしていると、この展覧会に行ってきたとか、神戸でミイラを見てきたとか、家族で見に行っていますので、おもちゃだったら余計に見たいだろうと思うので早めに置いていただけたらいいと思います。

(石井館長)

はい、ありがとうございます。

(星野委員)

昔の暮らし展を見学している若いお母さんと子どものようすを見ていたのですが、パネルに書いてある説明をお母さんが読んで聞かせて、「上は蚊取り線香、これは電気釜だよ」。ミシンも「これは、おばあちゃんの家にあった」、トースターでは「これは、ママの家にもあった」と、お母さんが語り部となり、子どもさんに伝えていました。とても上手く工夫された展示をされていると感じました。今の歴史展示は企画展とのセット品というような位置付けになっていますので、入館料を払って企画展を見る人はいても、歴史資料展示だけに入館料を払って見る人は、まずいないと思

ます。そのような中、どうやって親子連れに歴史展示を見るチャンスを作るのか、今回の歴史展示のリニューアルを機会に、一考願いたいと思います。

(飯尾委員)

今回の北原氏のコレクションですが、1,000点という数をどのように展示されるのか楽しみです。1910年代のおもちゃもありますので、もっと幅広い年齢の方の心を打つ展覧会になるのではないかと思います。あとアンティークが好きな人や若いカップル等、子どもだけではなく、若者に非常にアピールできるのかなと思いました。

ピアノのイベントが非常に素晴らしくて非常に楽しみで、これは私の館でも参考にさせていただきたいようなすごくいいアイデアだと思いました。音楽好きの方には非常に素晴らしいアイデアだと思います。

(岡副会長)

北原氏のコレクションは、大人のためのコレクションです。おもちゃだから子どもではなくて、むしろ、大人のノスタルジーをくすぐるというものです。北原氏のコレクションは、コンディションがすごく良いです。そして、コンディションの良いブリキのおもちゃというのは、動くんです。それを私は見たいです。レプリカ等があれば、こういうふうに動く、とか。あるいは、動画でこういうふうに光るとか。とにかく動くんですよ。そこを何か工夫して動きを見せられないでしょうか。ものを見せるだけでは欲求不満にならないかと思います。時間を決めて、レプリカを動かしてみるとか、こういうふうに動くんだ、というように。展示は展示でいいですけども、大人のためのノスタルジーと「お父さんの時代はこれで遊んだよ」という親子の会話というか、おじいちゃんと孫の会話かもしれない。そういうきっかけづくりを、北原氏と相談したらいいと思います。

それと、もうひとつの広告史というのが北原氏の一つのたて筋なので、それを何か芦屋のものと上手く引っかけるような、芦屋のものとコラボして何か合わせてできないかと思いました。まったく別個の美術展じゃなくて、芦屋に少しでも関わるようなものがあればいいと思いました。

ところで、先日、中之島美術館がオープンしました。具体美術の作品が随分と展示されていて、並べ方が違うから芦屋市立美術博物館で同じ作品を並べていても、中之島美術館で見た方がグレードが高く見えるという、環境がありますね。だから、改修工事をされるのは空調や屋根等でしょうけれども、どこか「工事前とこんなに変わりました」ということがわかるようにすることが大事です。要するにお客さん達に対するアピールで、具体美術の展示環境をグレードアップするとか、トイレをよくして見せるとか、何か内側の変化を考えておかないといけません。来館したお客さんが「工事前と全然変わってないよ」ということになるので。空調がよくなりましたというのは「そうなんだ」という感じなので、休館中にこうなりましたというのがはっきりわかるように、大変ですけどもアドバイスとして、今回、何かをされた方がいいと思います。

私の美術館でも大工事をしましたが、お客さん達には「動線を変えた」、「LEDになった」、「カウンターが取り替えられた」等しかアピールできなかった。とにかく見えるところを何か変化させるのです。「工事前は、こうじゃなかったね」というのが大事です。

(薮田会長)

はい、ありがとうございました。私も先ほど岡副会長が話されていたように、やはり「動かせる」、

「動くんだ」ということを理解させるというのは、動かしたことがない人からすると難しいと思います。おもちゃを並べただけではブリキの面白さは伝わらないと思うので、この場合はどう使えるかということを考えて展示するという、大きな提案をされているのではないのでしょうか。「勝手に動かさない」とはできないので、「こういうふうに動くんだよ」とどう伝えるかということが大事です。

(岡副会長)

歴史博物館では、昔、お茶くみ人形を展示した時に、からくり人形を時間決めて動かすということをされましたが、みんな「おーっ」となりました。それを見ただけで、その人形が動くということが理解できて「おーっ」となったと思うんです。そういうインパクトというのは、ただ、展示を見ただけとは違うので「ああ、立派な、美しいブリキのおもちゃだねえ」というのと、それが子ども達が遊ぶための、からくり的な仕掛けや驚きがあって、そこからいろんなアイデアが生まれて来たり、子どもが影響を受けたりするので、ゲームではそうはいかないところがあるので、手ざわりがあるというところの大事さを感じる事が大事です。

(若林委員)

チラシにレンジの写真が載っていますが、コレクションの中にままとのセットのようなものがあるのでしょうか。このようなおもちゃで遊んだような記憶がありますが、丸いちゃぶ台にそういうものを置いて、その時代の食卓の風景みたいな展示ができれば面白いと思ったりしました。

(室井学芸員)

動くおもちゃやコレクションに関しては、動かせる方向でしたいという話をしているのですが、ただ、ずっとできるわけではないです。

(岡副会長)

映像で撮っておくとか、何かイベントの時に特別に北原氏にさせていただくとか、それもテレビ局に取り上げられるとかみたいに何か仕掛けていかないと。欲求不満になるかもしれない、どうなるのかなど。

(薮田会長)

大人が欲求不満になりますね。

(室井学芸員)

動くものに関して、今、北原氏は動画制作に力を入れていらっしゃるなので、それも含めて展示を見るだけでは面白くないと思っています。そこで、こういった意図で動画の方は色々としようと、今、直接言っているところです。そういうことで、皆さんに楽しんでいただければと考えています。

(岡副会長)

これ、独自企画ですからね、巡回展ですか？

(室井学芸員)

実質的な巡回の企画です。ある程度のパッケージがあり、アレンジをして展示しています。

(藪田会長)

はい、ありがとうございました。『美博だより』は館報にあたるという理解でいいですか。

(石井館長)

はい。

(藪田会長)

では、報告2)「その他」に進んでいただきたいと思います。

(事務局：石田)

報告2)「その他」として、来年度に予定しております、改修工事について簡単に説明させていただきます。

<資料1を用いて、令和4年度機械設備等改修工事の概要について説明>

(藪田会長)

ありがとうございました。何かご意見ありますか？

(若林委員)

谷崎潤一郎記念館も改修されますが、今もちょっと寄ってきたんです。格調高い良い建物なので、いいなあと思っています。谷崎潤一郎って作家ご自身が芦屋にはとてもゆかりのある方で、その作品群というのは私も好きですけども、はっきり言ってだんだん過去の人になってきているのではないかと思うのは、私一人だけでしょうか。あれだけ立派な建物を維持していくわけで、もっと若い方、言い換えればもっと多世代の方に谷崎について興味をもってもらって、訪れてもらえるような仕掛けが今後いるのではないかなと思います。彼の生涯が展示してありますが、あれだけでいいのでしょうか。これだけお金かけてあそこを維持していくわけですので、谷崎潤一郎がすごい人だった、彼の作品のすばらしさについて、もっとわかりやすく皆さんに理解できるような、例えば『陰翳礼讃』なんて、本当にすごいと思うんですよ、あの作品。そういうことをもっと今の若い人達にアピールできるような、そういう何かができるませんか。以上です。

(藪田会長)

それは先ほど、岡副会長が言われましたね。改修した後、どう変わっているかということですよ。魅力再発信なんですよ。どうでしょうか？

(事務局：岩本)

はい。今おっしゃっていただいたのは本当にその通りだと思っております、何かを惹きつけるような、新しい魅力、おっしゃっていただいた陰翳礼讃も建築の分野でも、すごく触発を受けて取り入れられているようなところもありますので、そういうおしゃれな感覚や当時の着物等、和モダ

ンといったところの、今の若い女性にもうける部分もあるかなと思ひまして、そういういろんな若い世代を含めて興味をもってもらえるような仕掛け作りをこの休館中に探っていきたいと思っております。

(岡副会長)

やっぱり谷崎というのは、本当に成人向けというか、大人の文学なんですよ。関西に移ってきてからは特に淡路の人形浄瑠璃のこともそうだけれども、彼は東京の人だけれども、上方文化に触れて、彼は変化するんですよ。その大谷崎、文豪谷崎というイメージをかたちづくる『細雪』は今の人は読まないし、長いし、冗漫だし、やはり『源氏物語』の影響があるのですが、戦争の最中にあれ書いていたので、一種のこう、反戦的な気分の文学なんですよ。ただし、そういうので谷崎文学を若い人は読むかという、読めるものではない。変質的なものが多くて、エロティックで、官能的なところもあるので、そこが難しいんです。だから、現代人にどのようにアピールするかということは実に難しいです。そして、子どもには分からないというか、無理なんです。大谷崎のことを知らしめて、読んでみたくさせて、大人がここを聖地として訪れてくれるような仕掛けしかないかなと思ひます。子どもを対象とするのは難しいです。でも、文豪をリマインドするために記念館があるので、投げてしまわないで、とにかく芦屋には具体美術もあるし、小出檜重もいるし、福田眉仙はじめ、いろんな日本画家いるし、そういうことをリマインドする時の装置として、コンセプトを明確に打ち出して、大谷崎を忘れられないように、文豪谷崎を忘れないようにリマインドさせる。とすると、やはり子どもよりも中高年を対象とした想定で谷崎記念館を維持すべきだと思います。希望を失わないようにしてください。

(薮田会長)

予算を付ける側からは、そのような意見は出なかったのですか？ 議会で？

(事務局：岩本)

ぜひ、施設利用者が興味を引くような仕掛けを考えてくださいということです。

(薮田会長)

改めて大変ですね、美術博物館と谷崎潤一郎記念館。

(星野委員)

谷崎潤一郎記念館のコンセプト話をお聞きすると、美術博物館でも確かにコンセプトは大切と思ひます。

(岡副会長)

吉原治良という人がいますが、作家であって最新の美術思潮、高価な海外の美術雑誌をすぐ買って採用しています。それと若い時の藤田嗣治との出会いがすごく大きくて、藤田から「他者の影響が強すぎる」と罵倒されるんですよ、その時に人のまねはしないと、それが具体の原動力になる。それも結局、豊かさなんです。芦屋の豊かさの中に吉原治良が出てくるわけで、それが文化のバックボーンだということなんですよ。貧しさの中から出てこないのです。谷崎もものすごく贅

沢ですよ。文章の中にも文化的な芦屋の贅沢は出てくるかもしれない。『陰翳礼讃』なんて、日本人の贅沢がゆきつくはなし。

(星野委員)

谷崎潤一郎記念館今後の方向性についてのお話を伺うと、美術博物館も、もっと、とことんニッチの具体美術に特化する手もあるかと思ったりしますが、どうなのでしょう？

(若林委員)

世界からの具体美術に対する評価は、どういうふうになっているのですか？

(岡副会長)

どんどん上がってきていますね。

(若林委員)

逆の意見もありますけれどもね。見向きもされないっていう。

(岡副会長)

どこよりも早くに芦屋市で活動が行われたのですから、もう一度、芦屋の方ももう少し見直せばいいと思うし、芦屋の浜は具体美術の「聖地」になればいいと思います。

(飯尾委員)

評価ですけれども、外国での評価は確かに非常に高いです。

(若林委員)

そればかり聞いていたんですけれども、逆に「評価されていない」、「見向きもされていない」という意見も聞くので。

(飯尾委員)

なぜ、外国で評価されたかという、外国の方々、我々日本人の気づかない、何か、日本的なアイデンティティみたいなものをそこに見出しているということだそう。それをみんなに説明できないというところがもどかしいです。だから、何か色々な角度からとか、語り部からとか、何かそういう言葉でそれを伝えることができたらいいのですが。

(岡副会長)

だから何度も言っているけど、独創でないと残れないのですよ。独創をやれといったのが吉原治良であって、やはりそこを長谷川三郎の存在もあってね、革新的な独創を提唱した人がいたことが、一つの芦屋のバックボーンになるんですけれども、豊かさとか、最新のモノに対する鋭敏さとか、当然中央に負けないぞという、やる気とか、いろんなものが、ない交ぜになっているので、そこは芦屋という阪神間の都市の絶妙の文化風土というものが作ったものであって、大阪に近く、神戸に近く、みたいな。そして、藤田嗣治が神戸港に来るから若き日の吉原治良は勇んで作品をもって見

せに行くわけで、そういう歴史の変換の中で、芦屋のまちというよりは阪神間の文化と流通と富とそれから気風というか、何か、そういう全体から生まれる誇りがあるのですよ。それははっきりとは見えない、わからないかもしれないけれども、それが芦屋文化に火をつけているのではないかと私は思います。オーソドックスという意味で「小磯良平は芦屋からは出てこない」と、最近そう思ったりするのですけれども、篤実な貿易商の家の子ですからね、彼は。神戸港から出てきたということ。

(藪田会長)

谷崎について他にありませんか。私は谷崎が面白いのは、谷崎の住む家というのは全部自分がデザインしている。だから、彼は何回も家を住み替えているが、同じ家はないんです。ものすごく住まいというものにこだわった作家であるということでも、とても面白いなど。小説の世界が具体的な住まいの景観等頭の中で描かれているのだと。彼の建物が全部残っていると、あの時期の代表作の頃のアイデアとマッチしている。しかも、近代和風の建物、バリエーションというのは色々ある。今後、建築史的に近代和風の秀逸でもあるというふうになってくるかと思います。今の流れの中で再評価されていく、それを意識されたらいいのかなと思います。

(岡副会長)

建築物としてですね。

(藪田会長)

はい。では、次に議題1) 展示状況について、事務局より説明をお願いします。

(事務局：岩本)

はい、では、議題1) 展示状況につきまして、現在開催中の芦屋市展につきまして室井学芸員からご説明させていただきます。

(室井学芸員)

では、現在の展示状況について、現在、第66回芦屋市展を開催しております。現在は、2年に1回のペースで開催しております。

<第66回芦屋市展の説明>

(藪田会長)

はい、ありがとうございました。何か質問はございますか。

(星野委員)

出品者で市内在住者は何パーセントぐらいですか？

(室井学芸員)

おおむね半分程度です。兵庫県、阪神間の方が非常に多くて、大阪在住の方もいらっしゃいます。また、関西圏を越えて出品される方はあまりいらっしゃらないけれども、そのような方は芦屋市に

何かしらゆかりがあった方が多いです。出品者の中心は市内在住の方と阪神間在住の方で8割以上は占められています。

(藪田会長)

はい、ありがとうございます。他にご意見がないようであれば、次の議題2)「その他」についてお願いします。

(事務局：石田)

議題2)「その他」につきましては、令和4年度に計画しております歴史資料展示室の常設化の現在の計画概要を説明させていただきます。

<資料5・6・7を用いて説明>

(藪田会長) はい、それではご意見等をお願いします。

(岡副会長)

資料6ですけれども、校長先生方にアンケートを取る前に、この資料6が出てくる時に小・中学校の教員や歴史の教員が入っているのですか？意見等は聞いていますか？

(竹村係長)

現地点では、まだ聞いていません。

(岡副会長)

この回答が返ってくる前に聞いてみたらどうですか？ちょっと今の時代の流れの博物館の感覚からいうと古いんですよね。ルビひとつとっても「唐箕」とかも出てくるけれども普通の子どもは読めない、それをパネルにして見せると。それでいいのでしょうか、というのが私の意見です。どういう方向性で改修するのか、他館の最新の状況を見て、いいと思ったらそれを参考にしながら、やはり芦屋の小・中学校の教員の方とこれでいいかなというところを、ここに出てくる前に揉んでもらって、そこからじゃないかな、と思います。まだ時間があるので、業者を決めて、これだけしかお金がないからと、コンペにして、この歴史資料展示室のスペースの中でどういうことができるのでしょうか？ということで意見を出してもらって。パネルで見せるとか、キャプションを読ませるとか、それらを全部英語表記にしましょうとか、そのようなことは私は言いませんよ。機械ものもできた瞬間に古くなるからね。バナーで見せるのだったら、安いから上からかけるようにしたらいい。アイデア等を検討するのであったら、小・中学校の教員が入らないと、子ども達に見せられないです。伝わらなかつたら、結局は意味がないです。ちょっとこれではリニューアルといっても、何か工事前と同じような感じしかしないのではないかと、ちょっと心配です。とても難しいですけれども。

(事務局：岩本)

この資料6の書きぶりがちょっと堅苦しい感じになっていますが、実際に昨年度の第1回美博協議会でも委員の皆様から色々ご意見を頂戴いたしまして、ここが見所というスポット解説が必要

といったご意見や、専門家でなくても小学生が見ても興味をもてるような書き方ですとか、そういった内容につきまして、色々と精査いたしまして、パッと惹きつけるような、何かキャッチフレーズなり何なり、というところをいろんな方と協議しながら考えていけたらと思っています。

(星野委員)

小学生は遠足等で来館されるのですか？

(安部委員)

見学です。

(星野委員)

それは何年生ですか？

(安部委員)

小学2年生、3年生です。以前、担任の先生に聞いてみたら資料7のアンケートに書かれている3番の「利用したことがないかたに伺います」の回答欄に、すでに私が聞いただけでも回答が三つ入っているのですね。その一つ、上から二つ目の「何が展示されているかわからない。」で、学校はカリキュラムが決まっていますので、何月ごろのこの時期に行くよ。しかし、近くの学校だといいますが、遠くの学校だったら、山から下りてくる形になります。そして、また、山にもどるとなると、給食までに帰ろうと思えば朝一に出て行って直ぐに帰らないといけない。結構時間を取るのです。物理的なことですが、まず、時間的なこともあるのと、行ってもほしい同じような内容しか展示されていない。そして、子ども達にも少し難しい内容が多いとか、あと展示の数が少ないという話も聞いたことがあります。展示スペースのこともあるのだらうと思いますが、一クラスの学年で行ったら60人から多かったら100人を超える時もあります。クラスごとに分けて連れてきても40人近くいるので、半分が見ている間に他の児童は待機させないといけないとか、いろんな条件が出てきます。年間スケジュールの組み込み余裕がないということもあるんですけども、これを見ていたらあてはまるものがたくさんあるんですね。

やっぱり先生達は同じ連れてくるならもっとたくさん見せてあげたい。でも、ただ単に連れて行ってみるだけじゃなくて、目標や目当てがあるんですね。授業ですから。その本物を見て自分がどのように感じるのか、どう学ぶのか、目当てを達成させないといけないので、例えば説明内容も大事なんですけれども、学校の地域を学ぶところでどういうところを学ぶのかとか、教科書等を一度調べた上で企画されたらいいかなと思います。そして、それに合わせて学校にアナウンスをしていただいたら、この時期に連れて行ったら単元に合わせて見ることができるんだなというのも、学校の方で話になります。「遠い」というのもそうですけれども、いろんなことがありますので、その辺のところも考慮していただいてリニューアルに向けてできたらいいかなと思います。

(若林委員)

安部先生も山手小学校で、私も山手小学校を起点に活動しているのですが、「遠い」というのは山手目線なのですよね。美博まで訪れるのは本当に遠い。そうしたら、三条の方に目を向けたら、三条文化財整理事務所がありますよね。あそこに行くとかかなりの点数の土器等が展示してあります。

あそこにも、一度、子ども達を連れて行って見せてもらうというのは、あそこは出土品に特化してしまいますけれども、三条文化財整理事務所も見てもらって。そして、美術博物館で常設展示されるのなら絶対に市内最大の須恵器の大甕を常設展示してほしいです。三条文化財整理事務所に行ったらゴロンって転がしてあるんですよ。あれを見たらショック。あんな立派なものをね、大甕は常設展示にして、あれを見たらみんな「わおっ!」となりますよ。それこそ、「わおっ!」ってつけたら?何かそういう今どきみたいなのも必要じゃないかと思います。

出前授業もしてほしい。美術博物館から学校へ来ていただく。地の利が問題であれば、美術博物館から来ていただくっていうことをもっとやっていただけたらなど。

(星野委員)

尼崎市では、小学生はバスで来ています。

(安部委員)

この2月に造形教育展でお世話になりましたが、この時は4,050人も来ているんですね。やっぱり出品した児童の家族であったり、おじいちゃんやおばあちゃんであったり、そして、もう一回リピーターみたいな形で来たりするのですけれども、本校からも出品が50人、60人出ているのですけれども、まず、美術博物館がどこにあるかピンときていない人が結構います。そして、「出品するよ」と案内を渡しますが、そこに地図がついているのですけれども、やっぱりピンときてないのですね。それで、子ども達は市内めぐりをするのですけれども、図書館は児童なりにまあまあ分かりやすい。しかし、美術博物館はいまいちピンときていないのが現実。そのような現状があるので、やっぱり、来て見るっていうことであれば、ここは美博なんだなど、まずは子どもに覚えられるような内容、歴史があったり、美術があったりするのが必要、そこからだと普段からすごく感じています。それと、浜風小学校や潮見小学校等の近くの学校からは徒歩で来ています。山手・岩園・朝日小学校は、何回かお話しさせていただいていますが、片道、例えばバスを貸していただける等であれば全然変わってきます。山側の子は美博のことをあまり分からないというのは、そういうところに距離があったりする。家の方ももちろんあまり連れて行ったことがないということもあるからだと思いますが。そういう面でせつかく来るからには「ここは美博なんだ」とインプットされるよう、まず、場所を覚えてもらうことから。内容とかも色々踏まえてできたらいいかなと思います。

(事務局：岩本)

そうですね。立地の話で、山手の方からは距離があるというお話は以前からご指摘いただいております、バスのお話も以前もいただいておりますけれども、なかなか予算がつかないのが現状です。そのような中、先ほどの出前授業ですとか、動画コンテンツの作成ですとか、何かそういったところからまずできることがないかといったところで、このリニューアルに関するアンケートと合わせまして出前授業や動画に関するアンケートも合わせて今回取らせていただくことにしており、いろんな先生方のご意見を頂戴して取り入れられるようなことをぜひやっていけたら、と思っています。

(星野委員)

「昔のくらし展」を今やっていますが、今後は「昔のくらし展」はどうされるのですか?

(事務局：岩本)

はい、小学校3年生が昔の暮らしを実際に学ぶための展示がもちろん必要だと思っておりますので、色々工夫をしながらそういうところも何とか見ていただけるような形で常設展示を考えていただきたいと思っております。

(星野委員)

ちょっと具体的なイメージが湧かないのですが、今は、昔の道具をいっぱい展示していますので、同じように展示するとスペースが足りないですよ？

(事務局：岩本)

「ここの部分で昔の暮らし展をやります」という具体的なスペースは、まだ案として決まっていないのですが、資料5で示しているのは最初の案でございますので何とか色々工夫をしながらいろんな展示を見ていただけるよう考えていきたいところでございます。

(藪田会長)

その案の検討の仕方ということにしても、そのあとで見に来てもらえるというパートナーを予め入れたような形で検討を進めたらどうかという提案をいただいているかと思うのですが。そのことと、実際にどういう案を作るのかということとの二つかと思うのですが、いずれにしても、最新の案にならざるを得ない。今、議論されているのも取りあえずそこに入るので、学芸のスタッフだけで入るのか、その時にパートナーも念頭にに入れて入るのかということでき上がってくるものが違う、ということ指摘されているので、それは行政の立場としてそういう余地があるのであれば、それはそうされた方がいいです。

例えば、私の館が建設等になると、学校教育から兵庫県、広い範囲に関わっているわけですから、丹波の形状といったら丹波の学校に聞かなければならないので、ものすごく手間がかかります。芦屋市は幸いにひとつの市の範囲なので、学校の先生方は常に自分の地元を見ながら授業をしておられるわけですから、社会の授業をする時にどの程度、芦屋の話を入れられるかは多分日常的にわかっておられると思うから、そういう受け入れる側のニーズを念頭に置かないと「これを食べる」って与えられても、お腹一杯だったら食べられないじゃないですか。そのところが僕はとても大事だと思います。そして一回作ったら10年は変えられないぐらいのつもりでいかなければならないので、その仕込みに時間をかけた方がいいと私も思います。そのまま行政側の問題として仕掛けづくりをしてあげたらいいと思います。特に、山側と浜側の学校の問題をどうするか、わたしの館で言えば遠い地域をどうするか、という話と一緒にです。

(事務局：岩本)

はい、今のパートナーというところで、やはり、小学校の先生方をパートナーだと思っています。

(若林委員)

小学校だけですか。中学は？

(事務局：岩本)

芦屋の歴史を学ぶということについて、昔のくらし展や縄文時代とか歴史を学んだりというところで、実際に美術博物館に来られるのは3年生と6年生が授業や校外活動というの形が多いですけども、今回、イメージしておりますのが、この歴史展示は芦屋の市民の方でしたらもちろん大人の方でも「あ、面白いね。」と思っただけの内容にしたいと思っております、確かに小学生でもわかるような読みやすい解説ですけども、大人が見ても十分に面白いというような内容のものにできるといいなと。ということで、いろんな方と色々お話をしながら、より魅力のある展示にできるようなアイデアを出し合って行けたら、と思っております。

(藪田会長)

尼崎市立歴史博物館は、ご覧になりましたか？

(事務局：岩本)

はい。

(藪田会長)

どういう印象をもたれましたか？

(事務局：竹村係長)

尼崎市立歴史博物館は、最近で一番新しく作られたということと古い学校を利用してその建物自体が国登録文化財ですけども、尼崎の歴史が一目でわかるような形で展示がされているのは、かなり参考にさせていただいております。バナーやタペストリー等を使っているといった工夫も参考になりました。

(藪田会長)

尼崎の歴史博物館は廃校の教室を使っているの、いわゆる時代区分が教室を移動したら変わるんですよ。一方、芦屋市立美術博物館は一つの部屋にシームレスになっている。シームレスに時代区分がはたして合うのかどうか、私は少し考えた方がいいと思います。部屋が変われば時代が変わっているというのは、ものすごく分かりやすい。けれども美博は入口から一つじゃないですか。その時に、「ここは古代ですよ」、「これは中世ですよ」というやり方は意図する側からするとそうかもしれないけれども、見る側は理解するのは多分無理だと思います。一つの流れにする方があの展示室としてはいいのではないかと思うので、その辺をどうするかということと、この案ではやっぱり難しいと思います。

(岡副会長)

これを全部、歴史資料展示室に詰め込んだら、やっぱり大変だろうと思います。スペースの問題というよりは物理的な量の問題だからね。工夫で何とかなるものでもない、そうすると古代の展示スペースがある三条文化財整理事務所との連携とまでは言わないけれども、三条文化財整理事務所の方が古代をやるのだったら、美術博物館は他の時代を割り当て、見てもらうこととして、スペースがないのだから、もう少しスパッと割り切ってしまうとかしないといけないと思います。全部

やろうと思い、詰めこんだら、結局どっちつかずになるのではないかなあというのと、陳列替えをして、また次の時に出して、ということもなかなかできないだろうと思います。総入れ替えができるようなスペースがないと思うんですよね。そうすると、「あそこは、いつ行っても一緒」ということになるだろうし、平面のものはレプリカとか写真みたいなものになるだろうし、そうするとどっちにしても古臭い感じの展示になってしまうので、それを説明するのに文字が多いキャプションが入ってくるとかになり、リニューアルしてもワクワク感がないので、どこかでスパッと割り切ってしまうとか、連動するとか、連携するとか。もう、それ以外、私の意見はだいぶ皆さんわかっていただいている、貴館の皆さんが自分達で考えて頑張ったんだけど、「バーン」とちゃぶ台がひっくり返されないように、まず小中学校の先生方の意見を聞いて、スタッフの中にそういう先生方にはいってもらって一緒に意見を聞いて、ここまででいこうかというところまですれば、監修者もいるし、学校の先生方に聞くことによっても学校との連携も密になるのではないかと、というふうに思ったんですね。博物館には指導主事がいるところもあります。もちろん展示業者の意見も予算もありますし。だから、「あれ、割り切っているんですよ。」「すばっ、すばっだね。」、全部入れない。歴史資料展示室にこれを入れようとする、過密で、上に積まないと入らないということになります。

(若林委員)

エントランスホールの方に少し展示スペースを広げるわけにはいかないのですか？いかにせん、歴史資料展示室は狭すぎます。あのエントランスホールの使い方を、もう少し何か考えられないでしょうか？いつ来て拝見しても、何かもったいないな、という感じがするんですよね。

(薮田会長)

飯尾委員、どうですか？この歴史資料展示室の使い方について。

(飯尾委員)

盛りだくさん過ぎて・・・。役割分担とか、思い切って、捨てる、切る、ということが必要なのかな、と思います。これだけ伝えようと思っても、小学生がどれだけ受け止めているか、どれだけ印象に残るかっていうのも伝わったところからはじまるので、伝えようと思ったところ全部が伝わるということではないので、ちょっと整理と取捨選択が必要だと思います。歴史の展示というのは、いろんなものを見せるという感じですけども、何かビジュアルなものを一つ置いて、それをAとかBとかいう選択も必要かなと思いますが、ちょっと難しいところかと思います。このままずっとミックスで、1年、2年、3年、ずっとこのままということで、計画されるのですか？

(事務局：岩本)

はい、今、情報量がちょっと少ないというようなご意見をいただいたりしておりますところで、先ほどおっしゃっていただいた割り切りが必要というところをよくよく念頭に置きつつ、芦屋の歴史を学べる場として、いつ来ていただいても芦屋のいろんな情報を学べるというところで、常設展示化というのを図っていきたいと思っていますところです。ただし、あまり、ごちゃごちゃしすぎて、結局何だったのか、ということになりましてよくありませんので、何か目を引く、これだけはわかっていただきたい、というようなところにスポットを当てた、ちょっとワクワクするような、

そんな展示になるような工夫というのを、学校の先生方のご意見もお伺いしながら考えていきたいと思っています。

(藪田会長)

特に、小学校教育は3年生で社会、4・5・6年生で歴史を勉強しますが、タブレットも使います。タブレットでは何を提供するのかですが、タブレットでしたら拡大もできますが、実物とは違います。博物館には実物があるということでは、タブレットにはない要素だと思うのです。同時に、タブレットに提供できるようなデータも、博物館から発信できます。そういうものをどのようにしようかと考えると、やはり学校の先生が活用されるリクエストに応えるというのはとても大変なことだと思います。しかも、日本史の単元は細切れなので余裕をもって授業されているわけではないので、ある単元の次に芦屋のコーナーを入れようと思ったなら入らないわけです。しかし、そこに入れようとする先生がおられるわけですから、その工夫に会下山遺跡の資料なんていっぱいあるわけですから、関心のある先生なら「会下山遺跡を入れよう」となるかもしれない。そうじゃなかったら、入りません。だけど、そこに入れようと努力される先生がおられたら、会下山遺跡を展示したとしても意義があることだと思うのですけれども。そういうことを考えると、使う側からのことを考えていただかないと「こんなにいいものがあるんですよ」と自己満足でいくら言っても、多分、上手いかないと思います。それは『伊勢物語』でもそうだと思います。やっぱり、その部分ですね。だから、いくつ、教科書の中の単元で使ってもらえるものが提供できるか、しかも、こちらが自己満足せずに学校の先生方がこれを使ってよかったなと思われるような使い方を提案するのが、多分、10個は多いと思います。5つぐらいだと思います。その場合、いいもので丁寧に展示する等のような形でやっておかれる方がいいと思います。各時代の流れでっていうのは、私の館でも無理です。そんなの並べないです。並べるだけのいいものがないです、やっぱり。そういうことを考えると、その代わりに選んだものはよく使うといった、いろんな面で魅力を引き出していただけるようなものを並べるといった発想に変えられた方がいいのではないかな、という感じがします。

(岡副会長)

例えば、『伊勢物語』と芦屋なら、隣接する谷崎潤一郎記念館と連動して考えて、谷崎記念館のどこかのコーナーで展示する等を考えたらいかがでしょうか。今は歴史資料展示室のスペースが問題です。だから、譲っていけるとしたら、根本はここで、すみ分けていくとか、それもトータルに考えて。特化するとしたらどこを特化するのは私にもわかりませんが、それは学校の教諭と相談等して、そのクルーが変わったらパッと次のものに入れ替えるとか、ある種の恒久性がなくても替えるっていうか、陳列替えするっていうぐらいのことで三期ぐらいに分けてやるとか、何かそういう風にして分断して部屋を使わないと。昔の資料館というのは本当に、作った、はい、もう15年経った、そんな感じですよ。もう、レプリカ、レプリカ、写真パネル、ずっとそんな感じで、これで入館料を取って見せるの？という感じなんですよね。

そこを、そうならないようにというか、歴史はいつもこれですからとか、常設ですからっていうことにならないように少し考えておかないと、陳列替えする場合ももちろんです。スペースもないのであればね。ここは美術館としての役割はすごいので、ゆったりした感じで大きいんだけど、博物館の部分は押し込められている感じがします。美術館の付属なんですよね、という感じ。ただ、歴史部門を自分がやるとなったら、大ごとです。頭を抱えてしまいます。歴史資料展示室の展示を

大きく変えていこうとすれば大変だと思います。

(若林委員)

谷崎潤一郎記念館にも足を運んでもらえるというのは、グッドアイデアだと思います。

(安部委員)

昔の道具は地域の方からいただいたもの等を先生が授業で使うことがあるので、学校にもあります。山手小学校にも昔の消防ポンプ等があります。学校にもあるものよりも、美術博物館でしか見れない展示物があるというのが大事だと思います。あとは、子ども向けのわかりやすい内容のワークシートがあればいいと思います。3年生にはかなり言葉を崩して説明しているものが必要です。6年生だと、物語なら、物語をちょっとわかりやすくする等、ワークシートを準備していただけたら、先生達も資料として子ども達に渡せますし、学校でも授業で繋げていけます。

(事務局：岩本)

はい、ありがとうございます。

(星野委員)

何しろ歴史部門のスペースは狭いので、美術と歴史で半分ずつと言いたいところですが、歴史部門のスペースをもう少し確保したいですね！

(石井館長)

エントランスホールもありますし廊下部分もありますから、ある程度のスペースはいります。

(藪田会長)

現状では、歴史資料展示室の場所が壁の裏のようになっており場所がわかりにくいですが、何か改善は考えられますか。

(事務局：岩本)

はい、そのあたりにつきましても、歴史の常設展示があることがわかるようなサインやタペストリーでの案内等をしていただいています。今、デッドスペースになっている入口部分も、階段を上る時に気づいていただけるような形にしていきたいと思っています。

(岡副会長)

そういったアイデアは、プロのディスプレイ業者に入ってもらってディスカッションするべきです。我々が考えるのは「今、この素材があるからこの素材を使いましょう」等ですが、プロが入ると「アピールで、窓を作りましょう」とか、そういうアイデアが出てきます。もちろん予算もあるので、簡単にできることとできないことがあると思いますが、どう変えていけるか、問題点をどうクリアできるか、予算の中で知恵を出してもらったらいと思います。やはり、その道のプロでないとだめです。教育であれば実際に子どもと接している教師でないとわからないし、意見を聞くの

は大事です。悩んで悩んででき上がっても相手にされなかったら意味がないし、そこを心配しています。どうしたら予算の中で最大限の効果を上げられるかを考えてもらいたいと思います。

(安部委員)

以前、浜風小学校に勤めていたころ美術博物館から来ていただいて、実物はもってこれなかったのですが、色々お話していただいたり、ワークショップをしてもらったことがあります。このリニューアルの期間にされることはいっぱいあると思うのですが、この期間を利用して学校に足を運んでいただいて、子ども達の反応を見てもらって次の企画につなげていっていただけたらなと思います。学校も、もし来ていただくのであれば、時間や場所等の調整はできます。地域との連携、学校との連携を考えたら、こちらが博物館へ連れて行くだけでなく来ていただくということがすごく大事だと思うので、実際、子ども達の反応を見ていただいたらこういう作品で反応があるんだとか、こういう作品を展示しようとか、いろんな面につなげていけるのだと思います。市の造形教育の研究会もしておりますので、もし来ていただければそこで話もしますし、カリキュラムも組んでいこうと思いますので、そういったアプローチもどんどんしていただけたらと思います。よろしく願います。

(事務局：岩本)

はい、ありがとうございます。今の出前授業の話につきましては、おっしゃっていただきました通り、この休館中を利用して実際に動き出せるような方向性で考えています。

(安部委員)

よろしく願います。

(藪田会長)

資料6では、時間の流れで歴史を考えておられるのですが、もう一つの流れとして日本の文化を成り立たせる素材、木、鉄、焼物、本等が考えられます。例えば大刀があるからこれは鉄だと。大坂城石垣の石材があるから石だとか、『伊勢物語』があるから絵巻だ、三条村共有文書も古文書であるから、これは紙だと。このように、日本の文化が何でもって担保されているかを出してみるというのは、これは教科書にはない流れになります。流れは薄いけれども、そこで何を強調しているのかというのを出すっていうのが、全く同じ組立てでも光の当て方が違うので、そうすると、これは先生方と協働できるかもしれない。そのような考え方で時代の変化にあまりこだわらなくても、そのころはどのような文化だ、どのような材料かというのが組織的にここでは見れますよというふうにすればいいと思います。こういう組み立て方というのもいくつかあると思います。細かくなればなるほどわからなくなるので、5つぐらいのテーマにした方がよいと思います。資料6では15テーマになっていますが、まず、これを5つにしてもらう方がよいと思います。それぐらい考え方は簡素にされた方が、先生方と対応される時もいいかと思います。まだ時間がありますし、私どももお手伝いしますので、先生方との議論を始めていただけたらと思います。ありがとうございました。

(事務局：岩本)

ありがとうございます。

(薮田会長)

では、以上で、議題はすべて終わりました。お疲れ様でした。事務局よろしいでしょうか。

(事務局：岩本)

はい、本日は、多くの貴重なご意見をいただきましてありがとうございます。今日いただきましたご意見を、今回考えていきます歴史資料展示室の常設化の際には皆さんに興味をもってきていただけるように、ぜひ、反映させていただきまして、検討を進めていきたいと思っております。どうも、ありがとうございました。

<閉会>